

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2010. 3. 1

主な内容 頁

『賢者も愚者も経験から学ぶ。』

防大生は？』(寄稿)…………… 幹 事 千葉 徳次郎 …………… (389)

教官著書の紹介…………… 安全保障・危機管理教育センター 太田 文雄 …………… (392)

教官推薦著書の紹介…………… 元人間文化学科 田中 宏巳 …………… (393)

展示コーナー『坂本龍馬とその時代』…………… (395)



## 『賢者も愚者も経験から学ぶ。防大生は？』

幹 事 千葉 徳次郎

### 経験と体験

人間は経験の動物と云われる。「賢者は歴史に学び、愚者は体験に学ぶ」とは、プロイセンの軍人でありドイツの鉄血宰相と云われたビスマルクの言葉であるが、その意味するところはどこにあるか。経験と歴史と体験はどのような関係になるであろうか。経験とは、人間が五感（時には第六感も含み）を通じて情報（知識）を取得する事と云えよう。この情報には、視覚と聴覚を通じて得た他人の体験も含まれる。例えば本を読む、話を聞く、映画を観る等である。すなわち、経験には、自らの実体験と、他人の経験を情報として取り込む追体験（疑似体験）がある。

歴史は、人類の経験を教訓も含めて集約した情報であり、歴史を学ぶと云う事は、膨大

な量の他人の実体験を纏めて自分の経験とすることであろう。先述の、ビスマルクの言葉のポイントは、「体験」をどのように意義づけるかであり、ドイツ語に造詣の深い方の話を聞きたいものである。因みに、外国語を駆使できると云う事は二倍の経験が可能となることであり、防大で世界共通言語とも云える英語能力を強調する所以である。

経験により得られた知識には、単なるデータとしての情報（狭義の知識）と自らの行動に反映される知恵（見識）に区分されるであろう。「物知りだが、見識がない。」「頭は良いが、常識がない。」「経験は少ないが、賢い。」等はその例であろうか。人間は、所詮経験の動物であり、自分の経験の域を出ることはできない。但し、他人の経験を知識として修得

できることが他の動物と異なる所以であろう。

### 資質と識能

人の能力は、「資質（器）：人格・人間性」と識能（充填物）：知識・技能」からなると表現できる。あらゆる資質は人間として誕生した時にその萌芽をもち、社会生活を実践することにより陶冶されるが、実践（行動）するためには、何を為すべきか、為さざるべきかを判断するに必要な情報（知識）と知恵（見識）、そしてそれらを表現できる技能（行動）が必要となる。すなわち、情報がなければ知恵は生まれず、知恵のないところには実践は伴わず、資質の陶冶（器造り）は出来ない。集中的に知識を取得し、見識を練る場が教場である。居眠りするには余りにも勿体ない。

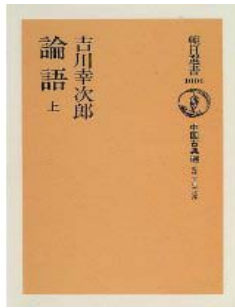
防大生は、幹部自衛官となるために修養しているが、目標とする「豊かな人間性、広い視野、科学的思考力」とは何であるかと云う事を知識として認知し、どのようにして実行するかを判断して知恵となし、自らの意志で実践して自分の器造りに反映させて欲しい。自衛官と他の職業の違いは、「……事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め……」という宣誓文に端的に表現される。約300に及ぶ職業職種分類の中で同じ宣誓文を使用する職業はない。云いかえるなら、「見ず知らずの国民の生命財産を守るため、代償を求めることなく、一つしかない命を懸ける職業」である。また、幹部とは、統率者（統率：指揮・統御・管理）、教育者であり、最も優れた戦士である。自衛官、統率者、教育者、優秀な戦士に求められる能力（資質、識能）とは何であるかを明らかにし、防大生活三本柱（学業・訓練、校友会活動、学生舎生活）を通じて実践陶冶して欲しい。

### 図書館と経験

防大図書館の蔵書は、質・量ともに関東地区でも最も優れたものの一つである。学生時代は特別入室許可を得て、保管書庫内で貴重な自由時間を費やした。読書はかなりの自由をもって、先人の経験を追体験する手段である。榎智雄初代校長が第一期生の入校任命式に示された「国難に際しての国民としての忠誠心」「偏することなき均衡のとれた人物」「民主制の理解」、そして学生綱領に示す「廉恥」「真勇」「礼節」等とは如何なるものかを自分の言葉でイメージアップし、損得ではなく善悪で判断して知識となし、行動に具現して資質を養って欲しいと思う。防大では「よき社会人」として、知・徳・体のバランスのとれた成長を図っている。知育・体育は他律的、強制的にも伸ばせるが、徳育は心の教育であり自主自律を基本に自分自身で成長を図ることが求められる。

将来は、経験未熟で部下の前に立ち、厳しい困難な任務に向かうことも予想される。学生時代に、努めて多くの歴史上の軍人を含めた優れた指導者に係わる読書を通じ追体験を重ね、「国民が安心して武器と部下の命を委ねられる幹部」に必要な人間性を養われることを願う。榎校長は「……如何に学問技術の造詣に深くとも、人としての性格や指揮する材幹において欠くことがあれば、本大学校に履修せる目的の大半は失われたのであります。」とも、第一期生に述べられたのである。

終わりに、人として『論語』『史記』『菜根譚』、統率者として『貞観政要』、教育者として『修身教授録』を推薦する。



「論語」の各条につき、従来の諸家の説の上に出て、新説をのべようとするのではない。われわれの祖先、それはひろく極東の国国にもまたがっての祖先が、ひろく読んで来た書物であるだけに、祖先たちが普通に理解して来た説にもとづきつつ、この書物を読むということ、それを趣旨とする。



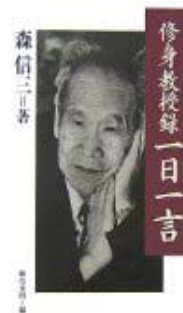
「人類の史官」司馬遷が彫琢した普遍の人間像、管仲・晏子・伍子胥・始皇帝が躍動する。歴史を描いた書物でありながらフィクションを越えたおもしろさをもつ「史記」を紹介する。



中国明の時代(1573～1619)に生きた「洪自誠」がのこした随筆集で .前集 222 条、後集 135 条からなる中国明代末期のものであり、主として前集は人の交わりを説き、後集では自然と閑居の楽しみを説いた書物である。



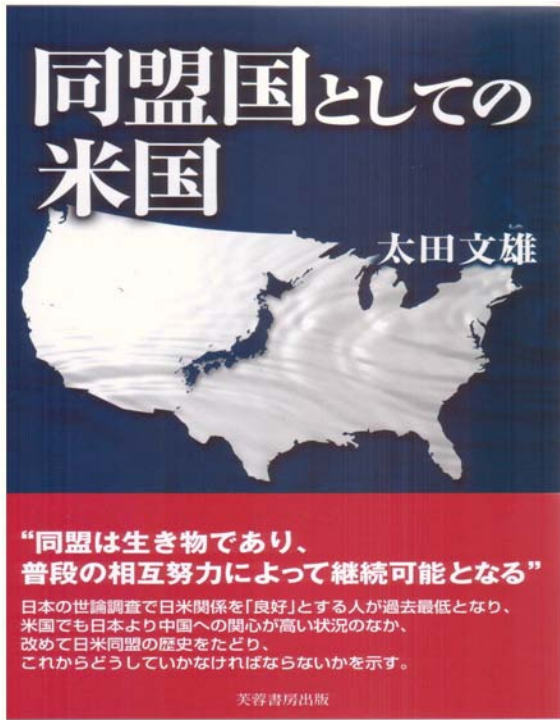
中国四千年の歴史で最も安定した時代「貞観の治」を演出した、名君と、それを取り巻く名家臣たち—上司と部下の関係学、組織運営の妙。リーダー学の宝庫。



『修身』内容は人として社会人としてのあり方を穏やかに説かれた教育論、人生論です。

~~~~~ 教官推薦著書の紹介 ~~~~~

『同盟国としての米国』



本書は、平成21年度後期から開始された地域研究の一環として本科3/4年生に対する「同盟国としての米国」の教科書として執筆したものであり、全課程を15コマで終了できるように15章立てとしている。この地域研究教務は「英語で教務を行う」と予告しておいたのにも関わらず約70名の学生が受講してくれた。特に8月から12月までは、米国陸・海・空各士官学校からの1学期交換学生6名が加わり、活発なディスカッションを伴う教務となった。評価は、試験を受けたい学生は試験を、論文を書きたい学生は「将来の日米同盟のあり方」という題目での論文を提出させたところ、論文の方は立派なものが出、最高得点の学生が海上要員であったことから、海上自衛隊の兵術同好会誌『波涛』に掲載し

所 属

防衛大学校防衛学教育学群

著 者

安全保障・危機管理教育センター

教授 太 田 文 雄

芙蓉書房出版（2009年）

て貰うことになった。

地域研究の教務が開始される平成21年10月始めに出版したのだが、脱稿したのは政権交代の選挙が行われた平成21年8月31日であった。結果的に同盟のギブ・アンド・テイクや在日米軍のところでは、現政権の政策を暗に批判する内容となってしまっている。例えば海上自衛隊のインド洋からの撤退や「第7艦隊だけあれば良い」といった発言に対する批判、普天間基地の移転先を沖縄県外や国外にすることが如何に軍事的常識に照らし合わせて妥当でないか、「平時駐留なき安保条約」といった主張の身勝手さ、駐留軍経費の削減や地位協定の見直しが健全な日米同盟に与える影響などが指摘してある。

出版から半年以上経過し、さまざまなことが判明してきたが、当時予測したことがかなりの中していると言える。まず「普天間基地の移設問題は日米間で決定的な対立となる」と「あとがき」で書いたが、果たして現在の日米間の最大の問題となってしまった。また

日本の民主党政権についてであるが、「村山政権のように現実的な路線に転換するのか、逆に米国から反米政権とレッテルを貼られ、日米関係が険悪になるのか？」と書いたが、現時点ではどうなっているかは読者の判断にお任せしたい。

さらに2010年2月には米国の『四年ごとの防衛計画の見直し』(Quadrennial Defense Review: QDR)が公表されたが、執筆当時は未だ公表されていなかったため予測を記述しておいた。本書で予測したように、兵力の再バランス(Rebalance)が眼目となること、複雑(Complex)かつ複合(Hybrid)な情勢への対策を制度化(Institutionalize)されなければならないこと、サイバー空間(Cyber Space)や地球規模の公共財(Global Common)の安全保障が重要視されること、対応としては各国との協力(Coalition)や省庁間協力(Interagency)が不可欠となることなどは、その通りとなり、本書で予測した上記キーワー

ドは2010QDRでそのまま使用されている。

出版後の平成21年11月15日には毎日新聞で学校長が「21世紀の安全保障政策を考える上で有益」として、また同日の産経新聞では拓殖大学の茅原名誉教授が「日本の民主党政権の主張する対等な日米関係ということが議論される中、論点を明示している」として、さらには翌年1月25日の公明新聞で大阪大学の坂本一哉教授が「同盟取引での冷徹な計算の必要性を説く」として、それぞれ本書についての書評を書いてくれた。このためか出版後半年にして販売部数は1000部を超えている。

日米両政府とも政権が交代して21世紀における日米同盟の行方は不透明になってきた。こうした時にこそ日本の安全保障を担う士官候補生が米国を良く理解し、日米同盟が如何にあるべきかを考える機会ではなかろうか？そうしたニーズに、本書が役だってくれたら筆者としてはこの上なく幸いである。

## ~~~~~ 教官推薦著書の紹介 ~~~~~

# 防衛の 務め

精神的拠点  
自衛隊の  
榎智雄



著 者

初代防衛大学校長

榎 智 雄

中央公論新社 (2009)

平成20年10月に榎先生の記念室を開設したが、その準備の過程で既刊の本書を何度

も読み返し、展示内容の構成に腐心した。本書のもつ品性と格調の高さ、内容の深淵さ、精神の豊かさに圧倒され、これを300字前後のパネル原稿に凝縮するのは、容易でなかったからである。作業の中から起こった、「これほどの内容の書が読まれずにいる現状」を憂う声が、再刊の直接の動機になった。

本書は、楨先生が入校式や卒業式、開校祭や新年祝賀式の際に学生に語った式辞等を集めたものである。人文科学教室で西洋史を担当された上田修一郎教授が編集し、昭和40年に初版が、ついで43年に2版が刊行された。この年十月に楨先生が急逝され、元慶應大学塾長小泉信三先生から寄せられた推薦文等を加えた増補版を第3版として昭和46年に刊行された。いずれも甲陽書房が出版の労を担っている。

今回の再刊は次數的には第4版になるが、初版から数えて44年にもなると、世間がすっかり様変わりし、原本のままというわけにはいかないこともあった。例えば、40年前に日常使用されていた表現が今では禁句になっているとか、仮名遣いが変わっているとか、あるいは昔の学生には読めたが、今の学生には読めない漢字、理解できない表現などである。明治生まれの楨先生の世代は、言語表現の基礎を漢学に置き、縦横無尽に難解な漢字表現をされ、昭和後半・平成生まれの読書子にはときにお手上げの場合もある。

そこで文字遣いや送り仮名、差別用語のおそれのある表現などを、僭越ながら必要最小限の範囲内で修正をさせていただいた。構成は第3版を基本にしたが、教育と関係ない1篇を削除し、11篇を追加した。追加のうち4篇は、新聞「小原台」を使った学生と教官の論争で、2つが学生の傑作である。1頁の文字数を150字余り増やしたので、全体の頁数は若干減った。また中央公論新社にお願

いし、「新版」らしく紙型、表紙のデザイン、写真、添付資料等を一新したので、まったく違う顔になった。結果的には大幅な変更になったので、「新版」と呼ぶべきかもしれない。

本書の意義は、第二次大戦後、まったく変わった国家体制の下で、国防の任につく者の心構え、国を守る誇りを説いていることにある。GHQの占領政策の目的は、日本を民主主義体制に変え、二度と戦争をしない平和国家にすることであった。数次の革命戦争を経て民主主義体制を築いた欧米と異なり、上からの指導そのものが、すでに民主主義の性質に反する。それでも民主主義は日本人に受容され、着実に浸透した。一方、平和国家を非武装と理解する一部の人々を除き、大多数の国民は、独立が国家の、自主自立が国民の最低限のモラルと考えた。こうして国家の独立と国民の自主自立を、民主主義体制の下で実現することが、戦後の日本に課せられた命題になった。このための努力は尊く、かつ崇高であり、それゆえに誇りとなりうる。

楨先生は、将来自衛隊を背負って立つ学生たちに、新生日本が国是とした民主主義の政治思想・哲学を取り上げ、自衛官・私個人の在り方を懇切に説き続けた。組織行動を優先する将来の自衛官幹部である学生に個性確立の重要性を語り、それが国民の目標である自主自立に欠かせないこと、個性が尊重されるゆえに服従が貴く誇りうるものであること、を繰り返して語っている。

訓示として話したことを活字に置き換えた本書を読み返してみると、学生の未来に対する限りない期待、自己錬磨につとめる学生への溢れるばかりの慈愛を感じないわけにはいかない。一語一語を噛みしめ、一行一行を誦んじ、一頁一頁を納得しながら耽読してほしいと念じる次第である。(文責 田中宏巳)

## 展示コーナー（貴重図書展示）

### 『坂本龍馬とその時代』の紹介

防衛大学校総合情報図書館は、江戸から明治にかけての図書、資料等も多数所蔵しています。今回はその中から、坂本龍馬と彼と関係の深かった人物や時代に関する書物、遺墨などを集めて展示いたしました。

| 展示位置   | 展示品                                       | 年代                                   | 備考           |
|--------|-------------------------------------------|--------------------------------------|--------------|
| 壁面ケース  | 遺墨                                        |                                      |              |
|        | 佐藤一斎                                      | 安政 1(1854)                           |              |
|        | 勝海舟                                       | M17                                  |              |
|        | 西郷隆盛                                      | [M1]                                 |              |
|        | 後藤象二郎                                     | [不明]                                 |              |
|        | 中岡慎太郎                                     | [不明]                                 |              |
|        | 井上馨                                       | [不明]                                 |              |
| ガラスケース | 貴重図書                                      |                                      |              |
|        | 1862年式英国歩兵練法                              | 慶応 3(1867)                           |              |
|        | Manual of Artillery Exercises             | 1860                                 | 伝坂本龍馬所蔵      |
|        | Manual of Field Artillery Exercises       | 1861                                 |              |
|        | Field Exercise and Evolutions of Infantry | 1862                                 |              |
|        | 海防急務上書                                    | 嘉永 6 (1853)                          | 山鹿素水         |
|        | 異風炮異様船製作記                                 | 嘉永 1 (1848)                          | 佐藤信淵撰        |
|        | 海防備論                                      | 嘉永 6 (1853)                          | 藤森恭助著        |
|        | 邊備要録                                      | 文政 6(1823)、天保<br>13(1842)、嘉永 2(1849) | 海防関連論文集      |
|        | 海防策                                       | [不明]                                 | 斎藤正謙著        |
|        | 海防策                                       | 嘉永 2 (1849)                          | 筒井紀伊守著       |
|        | 西郷隆盛傳                                     | M27～28(1894～95)                      | 勝田孫彌著、和とじ 5冊 |
| 展示台    | 関連書籍(明治、大正、昭和(戦前)のもの)                     |                                      |              |
|        | 雋傑坂本龍馬                                    | S2(1927)                             | 坂本・中岡銅像建設会編  |
|        | 坂本龍馬海援隊始末                                 | S4(1929)                             | 平尾道雄著        |
|        | 岩崎彌太郎                                     | S12(1937)                            | 飯田忠夫著        |
|        | 岩崎彌太郎                                     | S15(1940)                            | 田中惣五郎著       |
|        | 岩崎弥太郎：日本海運の建設者                            | S17(1942)                            | 白柳秀湖著        |

|             |                     |              |
|-------------|---------------------|--------------|
| 武市瑞山と土佐勤王黨  | S18(1943)           | 平尾道雄著        |
| 伯爵後藤象二郎     | T3(1914)            | 大町桂月著        |
| 勝海舟         | M32(1899)           | 民友社編         |
| 海舟先生氷川清話 正統 | M32(1899), 正は S4 復刻 | 〔勝安芳述〕；吉本襄撰  |
| 海舟日誌        | M42(1909)           | 勝安芳〔著〕；巖本善治編 |
| 海舟先生        | M43(1910)           | 戸川残花著        |
| 百鍊千磨 海舟と鉄舟  | M43(1910)           | 高橋淡水著        |
| 大西郷全集 第1-3巻 | T15～S2(1926～1927)   | 大西郷全集刊行会編    |



### 編集後記

今後も本校図書館において、蔵書展示等を実施していく予定ですのでより多く利用者の方々に見学していただけるよう図書館員一同お待ちしております。

編集庶務担当

NADAL Bulletin Vol. 24, No. 2  
防衛大学校図書館だより 2010.3

### 発行所及び発行人

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水  
1-10-20  
防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810  
図書館長 村井友秀

### 編集委員

新井重信 (体育学教育室)  
吉村幸浩 (応用化学科)  
講初靖 (国防論教育室)

### 編集庶務

木原啓一 (総合情報図書館事務室)  
森山伸一 (総合情報図書館事務室)

### 印刷所

防衛大学校 総合情報図書館事務室  
「図書館だより」事務局 出版